



Title	死をめぐる装いの現在 : エンディングドレスの意匠と変容
Author(s)	岸根, 紗葵
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103728
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

死をめぐる装いの現在

— エンディングドレスの意匠と変容

岸根 紗葵 上智大学大学院在学

はじめに

死亡者数の増加と出生数の減少により、現代日本は多死社会のただ中にある。少子高齢化や核家族化の進行は孤独死や無縁墓を招き、近年は家族葬や直葬といった簡素な葬儀や、身辺整理・遺産相続などの事務的な「終活」が広がっている。こうした簡略化の動きと並行して、「自分らしい最期」を求める死の多様化・個人化も進展しており、その文脈からエンディングドレスが登場したといえる。

エンディングドレスは、故人が棺で着用する最期の衣装を指し、その多くは洋装である。遺族の「故人を美しく送りたい」という願いと、本人の「最期まで自分らしく装いたい」という意思のもとで選ばれることが多い。近年では服飾デザイナーによるエンディングドレス専門のブランドも複数誕生しており、衣服デザインの領域において死生観の変化を可視化する文化的表象として位置づけられつつある。本研究では、その展開に注目し、現代日本における死装束の変容を考察した。

経帷子からエンディングドレスへ

江戸時代以降、日本の死装束は白い麻や木綿の経帷子が一般的であった。仏式葬儀において湯灌や剃髪、死化粧とともに着せられ、生者を死者へと移行させる役割を担ったのである。仕立てや着せ方には様々な作法があり、副葬品として笠や杖など浄土への旅支度が添えられた。経帷子は「死者らしさ」を儀礼的に具現化する衣装であった。

一方、エンディングドレスは白や淡色を基調と

しつつ、その意匠と意味は大きく変容した。宗教的な意味合いは薄れ、「人生の最期を美しく、自分らしく装う」ことが重視される。素材にはサテンやシフォンなど晴れ着用の生地が用いられ、ウエディングドレスに近い印象を与える。裏面にはガーゼ素材が用いられ、背面の長いマジックテープによって着脱しやすく、硬直や損傷が生じやすい遺体にも無理なく着せられるよう工夫されている。副葬品も旅装から思い出や愛用品へと変化し、死装束の意味は「浄土への旅立ち」から「この世の生を表象する装い」へと転じたといえよう。

つまり、伝統的死装束が「死者を死者たらしめる」衣服であったのに対し、エンディングドレスは死者を生の延長にとどめ、「死者らしくない姿」を示す装いである。ここには現代的な美意識や個性が反映されており、新たな死装束のあり方を提示しているといえよう。

ウエディングドレスとの接点

前述の通り、エンディングドレスの意匠はウエディングドレスと強く響き合う。多くは白やレースを基調とし、ウエディングドレスが純潔や門出を象徴するように、エンディングドレスもまた「人生の最期を美しく飾る」象徴性を帯びる。とりわけ、若い頃にウエディングドレスを着用できなかった世代にとって、エンディングドレスは最期に憧れを叶える衣装として受容されている。実際に「最期にこのドレスを着られる日が楽しみ」と語る高齢女性や、「女性に生まれたからには亡くなるまでおしゃれをしたい」と語る声が見え、エン

ディングドレスは死の準備を超え、人生の節目を演出する衣装として支持を集めている。

制作者側もこうした需要を踏まえ、ウエディングドレスの象徴性を継承する意図を明確にしている。例えば「さくらさくら」は、「一生に一度の『ウエディングドレス』があるように、一生に一度の『エンディングドレス』があります」というコンセプトを掲げ、死の衣装をウエディングドレスと同列に位置づける。ここでは、エンディングドレスの女性らしさと、人生の節目を飾る衣装としての性格が重層的に表れていることがうかがえる。

高齢者ファッションと死装束

エンディングドレスの登場は、終活の広がりに加え、高齢者ファッションとの接点からも捉えられる。高齢者は加齢に伴う体型や身体機能の変化で既製服が合いにくく、おしゃれの選択肢も限られてきた。この課題を背景に1990年代以降、ユニバーサルファッションやケアファッションが進展し、「いつまでも若々しく、美しくいたい」という願望が衣服選択に反映されるようになった(田中ら1998, 見寺2000, 山内2002)。柔らかな素材やゆったりしたシルエット、体型を隠す工夫は、高齢者の身体に寄り添い「おしゃれを楽しむ」意識を支えてきた。

この流れの延長に登場したエンディングドレスは、従来の死装束における限られた選択肢を補うとともに、身体の見せたくない部分を覆う点で高齢者ファッションとも重なる。しかし、棺の中で一度しか着用できず、購入の時期も判断が難しいため、普及は依然として限定的であると、死装束デザイナー杉下由美氏(光の庭)は指摘している。

こうした課題に応えるかたちで2024年に登場したのが「主役ドレス」である。杉下氏によるこのドレスは、還暦祝いや観劇など生前のフォーマルな場にも着用でき、最期には死装束としても機能する多用途性を備える。フリーサイズで体型や年齢を問わず着やすく、袖口や背面のファスナー

で日常の快適さと死後の実用性を両立している。

このように「主役ドレス」は、高齢者ファッションの「美意識と着る喜び」とエンディングドレスの「死を美しく飾る象徴性」に加え、生前の祝い着としても死後の死装束としても用いることができる実用性と多用途性を併せ持つ衣装である。結果として「生前にも死後にも着られる衣服」として位置づけられ、現代の死装束文化の多様化を体现している。

むすびにかえて

本発表では、エンディングドレスを伝統的死装束、ウエディングドレス、高齢者ファッションの3つの視点から検討した。第1に、伝統的死装束は、宗教性や儀礼性を備え、「あの世への旅支度」として機能してきたが、エンディングドレスはその性格を一部意匠に継承しつつ、「人生の最期を美しく、自分らしく装う」ことを重視する衣装へと転じている。第2に、エンディングドレスはウエディングドレスの象徴性を引き継ぎ、「最期を美しく飾る装い」として憧れを叶え、女性らしさと「人生の節目」を彩る衣装として機能している。第3に、高齢者ファッションの系譜を受け継ぎつつ「主役ドレス」へ展開したことで、生前の祝い場から葬送の場面にまで連続して用いられる多用途性を獲得した。こうした特徴によって、「最期までおしゃれでありたい」という願望が具体的に形となり、死と生をつなぐ象徴的な衣装として位置づけられることが明らかになった。

以上の考察から、死装束の多様化・自由化は伝統的な宗教的意義を希薄化させつつ、現代日本の死生観の変容を可視化しているといえよう。現代日本では、儀礼性よりも個人の美意識や見え方が優先される傾向が顕著であり、こうした傾向自体が日本の文化的特徴を示している。今後は着用者や遺族、葬送産業関係者への調査を通じて実態と文化的意義を把握するとともに、男性や異文化における死装束との比較も課題となろう。